12 月例会　報告

学校図書館と
読み聞かせボランティアについて
考える

▶ 読書関係の法律がいろいろできてきたけど、その内容を見るとボランティアに任せる部分がとても多くなっている。
▶ 流れが「官から民へ」という方向へいっているんですね。
▶ 後藤暢さんが「ボランティアをしていく中で、行政を変えていく力は絶対ある」と言っています。長崎市の学校図書館ボランティアの会の人たちは、みんなで手をつないで、学校図書館司書の配置をという要望書を出しています。閉ざされた学校図書館にボランティアでも入っていけば、そういう動きが行政を動かす力になると。でも、それだけではないと思う。本当にボランティアが入ることで行政を動かせるのだろうか。
▶ うちの学校では、すべての学年･学級ではないのですが、お母さんたちが朝行って読み聞かせをしているグループと、ＰＴＡのサークルとして給食後の休憩時間に第二図書室で子どもたちが来たらそこで読み聞かせをするという、ふたつのグループがあります。どちらも読む本については、先生に相談しているということはないそうです。私は、ちょっとそこに危険性があるのではないかと感じています。ただ読み聞かせをするということに満足していい気持ちになっているという雰囲気が多い。どんな本を読み聞かせするのかということについての勉強をしているのかが気になります。幼稚園で絵本についての勉強会をしてきた人たちが、いざ学校に入ってしまうとその勉強してきた知識を生かせないでいる。確かに先生の忙しい時間帯に読み聞かせをするので、先生も助かるという部分もあるけれど、嫌がる先生もいる。以前は、学校に入ってくるのを嫌がっていたけれど、ボランティアを活用しようというのが全体の流れになっているので、学校も積極的に受け入れるようになっているようだが、心の中ではどう思っているのか。お母さんたちがワイワイ言ってきたら No thank you だけど、まあ好きなように自分たちがやっている分にはいいかという感じ。官から民への丸投げ状態で、何のアドバイスもない。
▶ そのグループ内で、何を読み聞かせるかという打ち合わせはしているのですか？
▶ 個人個人で選んで読んでいる。
▶ 何を読んだかを先生は知っているのかしら？
▶ 先生は横にいらっしゃる場合もあるけれど、先生の朝の会議のときに読み聞かせをすることが多いから、先生がいない場合のほうが多いのではないでしょうか。だから　どんな本を読んでいるのか気になります。
▶ ＰＴＡのサークルで、勉強会をやりながら読みきかせをするのはいいと思うけど。しかも子どもの意思で、来たい子どもは来るという形で。外で遊びたい子は外で遊び、読み聞かせに行きたい子は来るという形。でも朝の読み聞かせは、クラスのお母さんが空いているときにやってきて、やっている人の話を聞くと、まず静かにさせてからやると言う。なぜお母さんが静かにさせなくてはいけないの？　それに静かにさせてから読み聞かせるものではなく、読んでいるうちに子どもたちが静かに落ち着いていくのが読み聞かせではないかしら。読み聞かせっていう言葉自体好きじゃない。聞かせるというのはこちらから一方的にという感じがしてね。
▶ その日わざわざ読む本を持ってきてという形ではなく、そこに本があって、子どもがそ

こから自分で選んで「これ読んで」という形がいい。図書館が充実していればそれができる。

≪学校図書館に司書がいると･･･≫

▶ 学期に 1 回くらい司書が回ってくるらしいけれど、子どもとの接触はまるでない。子どもと接触しなければ何の意味もない。活動自体見えてこない。
▶ 松戸市は９７年ごろから４７０万の予算で、５～６人の読書指導員を配置した。その人数で市内の小・中学校を巡回する。今も状況はあまり変わっていないと思う。
▶ 学校司書という名目で配置しているけれど、学校図書館を閉めちゃって本の整理をやっている。一つの学校に１・２学期に４日間くらいずつしかいられない。そんな日数では、本の整理しかできない。
▶ 以前子どもの通う学校の教頭に尋ねたら、「図書整理が仕事だから、子どもとの接触は一切ありません」と答えた。
▶ 図書費がもっとほしい。お話キャラバンの半分でもいいから･･･。
▶ お話キャラバンに 6～7000 万も出しているんだから、それを人件費に回せば、全校に司書を配置できる。キャラバンの職員に司書の資格を取らせるような研修をしてもらえばいいのではないか。
▶ 以前ＰＴＡの学年行事で、他市で学校図書館司書をされている方に来ていただいて、ブックトークを聞いたけど、あんな形でいろんな本を紹介されると、自然と「これ読んでみたい！」と思う気持ちが湧き上がってくる。
▶ 船橋市は、だいたいの学校に臨時職員として学校司書が入っています。11～12 人は、事務職という形だけれども、専門職として学校図書館司書として配置されている。その人たちは、職員会議にも出る。
▶ そこでは、先生用、子ども用、保護者用の図書だよりを出している。先生も、「今度この教材やるんだけど資料そろえて」ということを司書に言う。
▶ 4 月の年度始めの職員会議のときに、司書の人が先生方に「図書館とは何か」という説明をするのだそうです。
▶ 先生にも子どもにも、オリエンテーションをきちんとやるんですよね。
▶ 兼任の司書教諭ではだめ。担任を持っていたら、図書館の仕事まで手が回らない。
▶ 専任の司書は 8 時から図書室にいるから、いつでも図書室が開いている。あるクラスが授業で図書室を使っていても、司書がいれば他のクラスの子どもも図書室に入れる。船橋の学校図書館司書の人は、学校図書館は文化･歴史を伝承するところだとして、節句を大事にしている。お月見だとか、お雛祭りだとか、何らかの展示･企画をしている。先生だけではなく、栄養士や養護の先生とも連絡を取り合ってやっている。今、どういう勉強しているというのを連絡取り合って、いつでも資料を取り寄せられるようにしているし、公立図書館からもそこを中継して団体貸付してもらっている。
▶ 市川では、学校図書館を統轄している情報センターができている。だから学校図書館間の流通がうまくいっている。
▶ 浦安は学校図書館にちゃんと司書がいて、その元にボランティアがいる。ボランティアのコーディネートがとても大変だといっているけれど。専門家がいて、ボランティアがいるという形ならいいけど･･･。
▶ 北九州のある町では、学校と取り決めをした上でボランティアとして入っている。その話し合いがうまくいかないうちは入らないと言っていました。

≪学校教育にボランティアが入っていくことの問題点は？≫

▶ 学校ボランティアとして学校教育に入っていくことの問題点を少し整理してみたいと思います。今、ボランティアがいろいろな形で学校の中に入っていくことが当たり前のようになってきているけれど、学校ごとに取り組んでいて、その全容を教育委員会はちゃんと把握しているんでしょうか。ボランティアが学校に入ることがいいことなのか。どんな形で入っていくのだったらいいのか。良かれと思って入っても、行政が単に予算削減のためにボランティアを使おうとしていれば、非常に問題だと思うし･･･。地域の人たちが学校の先生や保護者たちといろいろなコミュニケーションをとりながら、自発的に出来上がってくるものならいいのか。

▶ とにかく行政が税金を教育に使わなくてはいけない！　それを削るためにいっぱい問題がおきてくる。

▶ 予算を削るためにボランティアを使う、そこの問題が見えなくなってしまう。

▶ ボランティアは下手すると自己満足に終わり勝ち。その場を崩す形で行政にものをいうなんていうことは滅多にない。全くないとは言わないが。

▶ 地域の人が学校にフラワーボランティアとして入っているんだけど、学校はその人たちにパトロールを頼んでいる。でもその人たちに何の保障もない。ボランティア保険に入っているわけでもないし。補助教員一人すらつけられない状況で、何でボランティア？教育の現場で何を先行してやらなければならないのか。履き違えている。解決すべき問題の優先順位が違う。今目の前にある問題すら片付けられないのに。危機感を感じる。

▶ 読売新聞に掲載された学校図書館の特集の中で新南小のＰＴＡが学校司書を雇用したという記事を読んだが、ＰＴＡで司書を雇用するというのもどうかと思う。

▶ 「雇用するときにはＰＴＡ内部でもいろいろ問題点を指摘する声もあったが、目の前にいる子どもたちは日々育っていくのだから待ってられないという思いがあって、ＰＴＡ雇用でも学校図書館に司書を入れた。でもそのままでいいと思わないから、市と交渉して昨年からはスタッフ派遣という形にした。」というふうに書いてありましたね。来年度はどうなるかわからないとも書いてありましたが。

▶ 学校支援スタッフの予算は総額として 1 億 4 千万程度。今年は 90 人程度のスタッフが派遣されている。今年は外国人の子どもための日本語指導のスタッフも加わったが、おもに少人数指導のためのスタッフ。少人数指導のためのスタッフは教員資格を持った人が臨時講師として雇用され、派遣されている。

▶ 少人数指導というけれど要は習熟度別授業。そこにスタッフ派遣している。

▶ 今、障がいを持った子どもが普通学級に入っているのだけれど、その支援のためのスタッフを要請しても派遣されない。手が足りなくて困っている。ＰＴＡでもずいぶん話し合ってきたけれど、教育委員会はどこ見てくれているんだろう。またそれも学校はフラワーボランティアの人たちを頼もうとした。ローテーション組んで来てもらえないかと。フラワーボランティアの方たちは断られたようですけど。

▶ 障がいを持った子どもたちを普通学級に受け入れるときに、そのための予算を組んでいないの？

▶ 丸投げですよ。親がついているのならいいよ、という感じ。親の自己責任になっている。

▶ そこにボランティアを入れていく可能性は、今後増えていくかもしれない。

▶ 特別支援教育ということで、今後統合教育は進んでいくと思うから、予算措置をきちんとして人員配置しなければ、そういうことになる。

▶ 松戸市の財政が厳しいというのはわかっているけれど、どこに予算をつけていくかという優先順位の問題ね。

≪ボランティアが入っていくことで本当に学校は変わるのか？≫

▶ ボランティアが入って学校が変わるためには、かなりボランティアが対等な関係で自由にものを言い、先生と学習しながら取り組んでいく必要がある。
▶ 対等な立場で同じテーブルに着いて話し合い、その話し合ったことをともに実行していく。そこからまた生じた問題を話し合って、というシステムをとっていかないと、単なるお手伝いになってしまう。
▶ たとえばＰＴＡでボランティアをするんだったら、ＰＴＡの中で学校は率直に「こういう問題を抱えているが、こういうふうに取り組みたいと思っている」と教育内容にまで踏み込んで説明し、「それなら私たちは先生のコーディネートの上で力を貸しましょう。でもそれで良しとしないで、どうしたらよいか一緒に考えましょう」というような対等な話し合いがあってこその協力だと思う。それを一方的にお金が足りないからボランティアしてくださいではね。学校がお手伝いしてくださいとか、私たちがやりたいからやらせてくださいとかでは、一方的で、お互いのやり取りがないし、横のつながりもないし、これでは互いに変わりようがない。
▶ 教師から見ても、教室に自分と同じ教員免許を持った人がいるのと、ボランティアがいるのでは違うようです。
▶ 人を使うのは相当エネルギーが要りますからね。
▶ やはりプロが入らないとね。
▶ 学校図書館は本の中身も問題ですよね。
▶ 選書は、巡回司書がやっているところもあれば、先生がしている場合もある。
▶ 出版社から送られてくるリストで頼むところもある。
▶ 松戸市内の小学校の司書教諭の先生は、ボランティアの人たちにしてもらうことは図書室の掃除とテーブルクロスとクッション、それ以外のことは先生がやる。選書も先生が行っている。
▶ 内容にかかわることには立ち入らせない。それはプロの仕事だと。
▶ ボランティアが学校へどんどん入ってくるという流れは今後も変わらないと思う。どうしたいいでしょうね。
▶ 市民の一緒に学校を作っていこうという気持ちがうまくすりかえられていってしまう。そういう思いがいつのまにか気がつくと利用されてしまっている。よほどしっかりした物を持っていないと。
▶ ＰＴＡはボランティア活動ではない。教育権を持っている親の権利として入っていくもの。でも、権利という認識がない。
▶ 自分の権利について認識していないということは子どもの権利についても認識していないということ。
▶ 子どもの権利を保障する場としての学校図書館についての認識もない。
▶ やはり学校教育の中にボランティアは入ってはいけないね。
▶ 入るんだったら、ボランティアのコーディネートができる専門職がいないといけない。
▶ 専門職がいるだけではなく、その専門職がコーディネートできる余裕がないとね。
▶ なかよし学級には専門職の先生が 3 人いて、そのほかに臨時職員 3 人くらいついているけれど、そんな関係ですね。
▶ 臨時職員でもいいから学校図書館にもちゃんとした人を入れてほしいね。